

座長のまとめ

第1群の座長をつとめて

河内良江
(金沢社会保険病院)

第16回石川看護研究会学術集会の第1群の座長を務めさせていただきました。第1群は臨床の場で自分達が行っていることに、意義を見いだそうと研究的に取り組んだものが中心の4題の発表でした。

第1席の国立金沢病院、嶋本保代さんは、虚血性心疾患を持つ患者さんに再発予防のためにする日常生活指導が規制を与えることが多く、QOLを低下させる可能性があり、その影響因子として種々あるが今回は性別で検討したところ、男性は危険因子のある方が、日常生活の注意点が明確になってこれからの生活を前向きに考えられるようになり、女性は危険因子があっても指導により、不安が減少して心理的に安定し、緊急入院他で退院後は家族に理解・協力を求めるようになると発表されました。質疑では評価の時期について、危険因子のある方が前向きに……ということはどう認識しているかなどで意見交換がされ、点数が低下した方への指導方法を検討していくなどの課題が示されました。

第2席の県立高松病院、高木いづみさんは重度痴呆老人が大半を占める病棟で、セルフケア能力やADL低下による嚥下性肺炎を予防する目的で抗菌作用があるといわれている番茶を用いて口腔ケアを行い、導入前後6カ月を要して調査したが対象の理解が得られにくく、ケアの方法が限定されて思うような効果は得られなかったという発表でした。重度痴呆老人のケアということでご苦労が伺えました。質疑では、番茶を用いた理由やケアの方法について意見交換され、今回の研究を発展的に継続を望む声が上げられていました。

第3席の金大医学部附属病院、吉田由希子さんは膀胱腫瘍で尿路ストーマ造設を余儀なくされた患者さんに、ボディイメージを修正し受容していくために術前よりストーマ装具の仮装着を試み、どのようなイメージを得たか調査され、保有後の

イメージとして「大きさ・重さ・感触・外見」があげられ、自分も他者も気づかないという安心感を得られて、ストーマの仮装着は保有後の具体的な生活のイメージに有効であると発表されました。質疑では面接を拒否した方の中に、いまだにストーマを受容できず、苦しんでいらっしゃる方の紹介もあり、このテーマの持つ奥深さが浮き彫りにされたように思います。

第4席は石川看護研究会・褥創プロジェクトによる発表でした。NTT西金沢病院、松井優子さんは褥創発生要因にギャッジアップが影響しているという実態調査に基づき、ギャッジアップ対応二層式エアマットレス導入を機に3種類のマットレスを用いて臨床実験研究を行い評価し、導入したものが褥創発生を認めず、予防効果が高いと発表されました。質疑では標準といわれているケア内容や、臨床実験研究であり倫理的配慮についてはどうだったか等について意見交換されました。

今回1群の座長という大役を頂き、1席毎の質疑応答で最初はどうか、発表者の皆様に充分思いのたけを伝えられるよう配慮できるか気にかけていましたが、会場からのご質問・ご意見も多数いただく事ができ、無事終えられたことを感謝しています。学会長の言う「現実に体験することとそれを意味づける力・感受性・知識・研究心・時間」を結集した賜物である発表を聞かせて頂きながら、自分達が極めようとしていく事と、その対象が患者様である故に生じる倫理的配慮という事に思いを新たに致しました。対象との関りの中で日々「何が看護であり、看護になっていないとすればそれは何故か」を問おうとする中で実践から研究へ進める上で慎重さを要求されると感じました。

最後になりましたが研究に取り組まれた皆様の益々のご活躍をお祈り致します。